

まえがき

『情報社会誌論』の Vol. 8 を2001年に出してから、しばらく間があいてしまった。わたしが職場と居住地を変更したことに起因する。新しい環境と新しい人間関係、新しい周囲の制度に適應するためには、時間を要する。しかし、今回 Vol. 9 を続けて出せることになったのは、うれしいことである。そして、多分、Vol. 10 も遠からず出せる見込みである。

その間に、『情報社会誌論』の論文もそれを書いた仲間たちも、それなりの発展を遂げている。掲載された論文が、本人の知らない思わぬところで引用されていたという報告を受けたり、また、論説資料保存会の『教育学論説資料収録論文一覧』にも本誌掲載の論文が複数本採択されて、改めて日の目をみたりしている。また、バックナンバー寄贈の請求も、いろいろな大学図書館から来ている。執筆者のなかには、現在大学で教えている人々も少なからずいる。

今回の号は、東京大学大学院情報学環の竹之内禎助手の手伝いをえた。氏は、Vol. 4の執筆者でもある。

本誌は印刷・製本まで手作りであるが、今回も「業者に出しませんか」といふ強力な提案もあって、どうしようかとずいぶん迷った。業者に出したほうが、きれいにできるし、わたしも楽である。今の学生たちは、紙をキチンと折ることすらままならない。レポートを出すにしても、ザクザクの綴じ方をしてくる。使いものになるものを作るまで指導するのは、とても大変である。しかし、わたしのかわっている間は、今までの方針でゆくことに決めた。

これはわたしの、何でもお金がないとできなくなっている現代の風潮への批判でもある。教育もすべて学校や教師に準備万端整えてもらって、「出席してやっているのだ」という状況で学習するので、いくら就学率が高くなっても「生きる力」に結びつかない。最近発表の国際学力テストで明らかになった日本の生徒の読解力・応用力低下を、文部科学省あたりはPISAショックと呼んで大騒ぎをしているけれど、学んだことの応用力がないのは当たり前だと思っている。大量生産、機械生産は、能率よいきれいだけれど、世の中それだけではすまず、規格化された大量生産のすきまに、世の中を動かして行くのに必要な潤滑剤があると考え、多品種少量生産化すれば、その必要性は、ますます増えてくる。また、作業現場を知ることから、機械化をどう改善するかといふ新しいアイデアも生まれてくる。お金がなくなっても、お金で生きることしか考えられず、コンビニ強盗やタクシー強盗にすく向かうような人々を作り出している現代教育の風潮に対する、わたしのささやかな抵抗でもある。

2004年12月1日

関口礼子